

さおり こひつ
沙織と狐筆

「ただいまー。」

自宅のドアを開けて帰宅のあいさつ。広い玄関に響き渡った私の声はすうっと消えて、「おかえり」の声は聞こえない。

今日もいつも通りか、と私―美翔沙織―は小さくため息をついて豪華な手すりの付いた階段を上る。

二階の私の部屋に入り、通学カバンを壁にかけてベッドにどつと倒れこむ。

しばしの間放心していると、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ。」

ベッドから顔をあげてドアのほうを見やる私。こげ茶色の木でできたドアは立てつけの悪そうにギーツと音を立ててゆっくり開いた。

「お帰りなさい、沙織。」

「ただいま、おばあちゃん。帰ってきてたんだ。」

「ええ、今ちょうど。」

私が体を起こす事によってできた間におばあちゃんが座る。おばあ

ちゃんと二人で話をするときはいつもこんな感じにベッドの横に二人で腰かけるんだ。

おばあちゃんと体をくっつけてるとなんだか安心できるんだよね。

「学校、休んだのかい。」

もうじき中学校に入学してから半年が経つ。あんまり……というか全然友達作りが得意じゃない、引っ込み思案な私。

クラスの雰囲気馴染めなくて、時々学校に行くフリをして図書館に学校が終わるまでいた事もあった。

「ごめんなさい……」

「沙織は昔から人見知りだったからねえ。ゆっくり行けるようになるればいいよ。勉強していかないわけじゃないんだらう？」

コクン、と頷く。

おばあちゃんは優しい。ダメな私を、温かく応援してくれる。

「大丈夫。沙織は強い子ですから。私はいつでも、沙織の味方ですよ。そうだ。」

何か思いついたようにおばあちゃんは立ち上がり、自分の部屋へと歩いて行った。

数分後。戻ってきたおばあちゃんの手には一本のペンが握られていた。確か……

「万年筆？」

「ええ。この家を建てるときに地面に埋まってね。綺麗だったから思わず保管していたんだけど、沙織にあげる。まだ使えるはずですよ。」

「あ、ありがとう。」

おずおずと万年筆を受け取る私。

本体の黒い光沢は全く失われてなく、所々茶色の模様が入っている。「それじゃあ、私は夕ご飯の準備をしますね。沙織も手伝ってくれるかい？」

「うん！」

西日が差し込んで赤く染まる部屋を出る。

机に万年筆を置こうとしたときに万年筆が少し動いた気がしたけど、気のせいだよな。

夕食とお風呂を済ませ、自室に戻った私。

ふと、机にある万年筆に手を伸ばす。

「すごい……まるで新品だよ。」

この万年筆に不思議な力があるのか、それともおばあちゃんの手入れがしっかりとしているのか、傷一つなく部屋の照明に照らされている。

風がカタカタと窓を小さく揺らす音で、ふと我に返った。どうやら、

万年筆を眺めているうちにずいぶんと時間が経ってしまったみたいだ。

(うう、ちょっと冷えるな)

季節は春になったばかり。寒いには慣れてる私でも、まだまだあったかい毛布が恋しい。

ベッドに潜った途端に眠気が襲ってきて、いつの間にか私は万年筆を持ったまま眠りについていて。

翌朝。自然と目が覚める。眼前には例の万年筆を握りしめる私の拳があった。

(なんで私コレ握ったまま寝ちゃってたんだろ。変なの。)

大きなあくびをして万年筆を机に置こうと体を起こし、そのまま机に手を伸ばした。

その時だった。

「くああ……ううん」

一瞬で頭の中が真っ白になった。

なんと手に持っていた私の万年筆から光があふれ出し中から両手に乗る大きさの子ぎつねが現れた。

「え？えっ！？」

きつねは机に軽々と乗り移ると興味津々といった感じで目を輝かせながら辺りを見渡している。

私のこびりついていた眠気はとうに消え去り、頭の中はたくさんの

「？」で埋め尽くされている。

「だ、誰なの？」

私が恐る恐る話しかけると狐はより一層目を輝かせて、答えた。

「ボクは狐筆こひつ！君は？」

「美翔、沙織です……。」

これが、私と狐筆の初対面でした。

狐筆の願いと三つの宝玉きぼう

突然私の前に現れた不思議な子ぎつね、狐筆。

パジャマから普段着に着替えた私は、改めて狐筆と向かい合った。

そこで詳しく聞いた狐筆の話をもとめると、

狐筆は大昔に滅んだ「妖狐の里」というところの出身で、妖狐の里の長老が、里が滅ぶ際に狐筆をこの万年筆に封印し、この人間界に解き放った。万年筆は私のおばあちゃんの手によって保護され、なぜか私の手に渡ったことで封印が解けた。ということらしい。

「なるほどね……。狐筆はこれからどうするの？」

「ボクは今から宝玉さがしに行くんだ！」

「宝玉？」

「そう、人間界には三つの宝玉が隠されていてね、三つ全部集めるとなんでもお願いが叶っちゃうんだ！」

そんな絵本のお話みたいなの……なんて思ったけど、そもそも狐筆が万年筆から出てきた事自体が不思議なのだから、その願いを叶える三つの宝玉とやらがあっても何らおかしくない。

「ボクは宝玉の力で妖狐の里を復活させて、お父様とお母様に会う

んだ！」

そうか。うんうんいい夢だ。ぜひとも狐筆には夢を叶えて欲しいな。

「だから、サオリ。力を貸して！」

「……ふえ？」

唐突な申し入れに思わず情けない声が出てしまう。

「狐筆、そのお私はどのように力を貸せばいいの？」

「ボクと一緒に、宝玉を集めてほしいんだ。まずは森にある宝玉だね！」

「無理だよ。私なんかには、できっこないよ。」

「どうして？」

どうしてって、もっと適してる人がいるはずだから。私なんかより、ずっと適している人が。

でも、狐筆は私を頼ってくれてる。キラキラとした瞳はまっすぐに私を見つめている。

おばあちゃん言葉が脳裏に浮かぶ。「沙織は強い子ですから。」

できっこないって諦めてる臆病な私。おばあちゃんと狐筆の期待に応えなきゃって必死な私の中で喧嘩する。

(……確かに、私には無理な話かもしれない。それでも!)
そして、私は臆病な自分を突き放した。

「……わかった。わたしも、狐筆の夢を叶えたい!」

「サオリ……!」

「行こう、狐筆。最初は森にあるって言ってたよね。」

勢いよくドアを開けて、階段を下りていく。

「おばあちゃん、行ってきます!ちよっと帰り遅くなるかもしれない。」

おばあちゃんはちよっとだけ驚いた表情を見せて、すぐにいつもの優しい笑顔に戻った。

「そういえば、おばあちゃんは狐筆のことを知ってるのかな?帰ってきたら聞いてみよう。」

「いってらっしゃい。私今日帰ってこれませんから、晩御飯は冷蔵庫に入れておきますね。」

「うん!」

急いで靴を履いてドアノブに手をかける。ここから踏み出す一歩が私と狐筆の冒険の始まり。

太陽はまだ昇りはじめたばかりだ。深呼吸して、外への一歩を踏み出した。

みどり
翠の宝玉と森の仮面

やってきたのは、町はずれにある大きな森。

人の手が付けられておらず、いかにも秘宝が眠っていそうだ。

私と狐筆はそんな森の道なき道を進んでいる。

うっそうと茂る木々。都会に住んでいた訳じゃないけど、森になん

て入ったことのなかった私にじわじわと恐怖心が生まれていく。

「やっぱ無理かも……狐筆は怖くないの？」

「どうしたの？こんなに面白そうじゃん！」

「お、面白い？」

「うん！ほらこれとか！」

そういつて狐筆が口にくわえたのは、大きな青虫。

「~~~~っ！」

何とか悲鳴を押し込めたけど、目じりに涙がたまる。

「もしかして、これ苦手だった？」

「虫はちよっと、ね……。ほら、それよりもこっちに本当に宝玉があ

るの？」

「うん。懐かしい気配を感じるんだ。」

「懐かしい？」

「言っただけじゃなかったっけ？三つの宝玉はね、もともと妖狐の里に伝わる秘宝だったんだ。里が滅んだ時に一緒に人間界に来たんだ。」

「へえ……。だから狐筆はその気配を感じることができるとことね。」

いつの間にか恐怖心はどこかへと消え去り、ずいぶんと森の奥まで来ていた。

「わあ！」

突然狐筆が走り出す。私は狐筆の小さい体を見失わないように急いで追いかけた。

少し走ると、運動場位の大きさの開けた空間に出た。今まで歩いてきた葉っぱに覆われほの暗かったところとは違い、暖かな太陽の光が差し、花が咲き、鳥やたくさんの動物がひなたぼっこをしている。

まさに『聖域』と呼べるような空間だった。

「狐筆ー？」

狐筆を探しに聖域に踏み込む。鳥も動物も、私を怯えて避けたりせずに和やかに過ごしている。

「沙織、宝玉が近くにあるはずなんだけど……見える？」

私は小さい狐筆の体を持ち上げて、もう一度聖域を見渡した。

全体を注意深く探してもそれっぽいものは見つからない。

(まさか空にある……なわけないよね)

と思いつつも空を見上げると、なんと空がどんよりとした赤紫色に染まっていた。もう夕暮れ時かなと腕時計を確認するけどまだお昼。ねえ狐筆、と下を向くとついさっきまで楽しそうにしていた鳥たちがどこかへと逃げ出す途中だった。

ついに私たちだけになった聖域にズシン、ズシンと何かの足音が響く。

足音の方向に目を向けるとなにやら黒い影が迫ってきていた。

だんだんと姿を現していくそれは、サッカーゴールほどの巨大なイノシシだった。

「なにになにないに、イノシシ!? 狐筆の友達?」

「イノシシって言うの? ボクも知らないよ〜!」

とりあえず距離をとる私たち。

よく見てみるとイノシシの額には禍々しい仮面がついている。

そして突然、イノシシが話し始めた。

《翠の宝玉を手に入れようとせし者共よ。》

「は、はひいー!」

《我は翠の宝玉を守護する森の仮面。欲しくば我を倒し、力を示してみよ!》

「わかった!」

無鉄砲に森の仮面へと突っ込む狐筆。

「た、戦うの……?」

案の定ぶつかった途端に跳ね飛ばされる。私は急いで駆け付けて狐筆の体を起こす。

「くー強いなあ!」

《今度はこちらから行くぞ》

森の仮面は体勢を低くして、四本の脚にぐっと力を込めた。

「ひいひいひい!」

狐筆を抱えて横に転がった瞬間、私たちがいた場所を森の仮面が物凄い勢いで駆け抜けて、それによって生まれた突風が私の着ているジャケットとポニーテールを激しく揺らした。

「こ、狐筆、あんなのにどうやって勝つ気なの?」

「……わかんない!」

「ええええええ!」

そんなことを言ってる間にも森の仮面は次の突進の構えをとっている。

「とりあえず仮面を破壊しよう!」

次の突進も、横に転がって避ける。けれど狐筆と反対方向に転がったため少し距離ができてしまった。

(どうしよ……?)

どうやら森の仮面が狙っているのは狐筆のようで、森の仮面の突進を狐筆が避ける、といった攻防がすでに何度か繰り返されていた。(どうやって仮面を破壊するか……突進の姿勢をとる一瞬を突くのは難しい……)

《ちょこまかと小賢しい!》

森の仮面は少しお怒りのようでスピードがどんどん上がってきている。

「くっそー。あのイノシシめ。仮面に触れられるならボクの自慢の牙で一撃なのにー!」

いつの間にか私のそばに来ていた狐筆が愚痴をこぼす。その顔から、疲労の色がうかがえた。

(森の仮面の動きを止める……イノシシ……)

本で読んだことがある。丸い闘技場で赤い布を使って突進してくる牛を華麗に避ける、スペインという国の国技、闘牛だ。森の仮面はイノシシで、牛じゃないけど突進してくるんならこの際どっちでもいい。

(そうだ!)

再度、そばに来た狐筆に話しかける。

「狐筆、ちょっと赤い布になってくれる?」

「え?え?」

私は軽々と狐筆を抱えると大きな木の横に移動した。

狐筆を大きな木の前に置く。

いつも通り突進してきた森の仮面。ギリギリのところまで狐筆を引っ張ると森の仮面、もといイノシシは止まり切れずに木に激突した。

「今だよ狐筆!」

「う、うん!」

目を回す森の仮面に狐筆は思いっきり噛みついた。

《ぐあああああああつ!い、いいだろう。翠の宝玉、おぬしらに託そう。》

イノシシから外れた森の仮面は光を放つと虚空から丸い物質を生み出した。

《これが翠の宝玉だ。大事に扱え。》

それだけ言うと、森の仮面はイノシシと共に森の奥へと去っていった。

「とりあえず一つ、でいいんだよね?」

「うん!」

私の差し出した両手に宝玉が落ちてくる。透き通るグリーンの輝き、それはまさにエメラルドのようだ。

突然、宝玉から狐筆へと光線が伸びる。

すると驚いたことに光線に当たった狐筆の体が大きくなっていった。

丸みを帯びていた体はすらっとしたシルエットになり、顔つきも子供、というよりは少年といった感じだ。

大きさも両手に乗るサイズから私の腰あたりまでに大きくなった。

宝玉は光線を出し終わると狐筆の中へと吸収されていった。

「やった！大きくなったよ、沙織！」

「これも宝玉の力なのかな？まあいいや！おめでとう、狐筆。」

もうさつきみたいには抱えられないな、と少し寂しくも思いながら、私は狐筆の茶色い毛を撫でた。

「さあ次の宝玉を探しに行こう！こっちだよ！」

「も、もう行くの？少し休憩しようよ」

慣れない道を歩いたせいであんな私に、何とか気力を振り絞って歩くのも速くなった狐筆についていくのでした。

あお
蒼の宝玉と水の仮面

次にやってきたのは、岩がつららのように垂れ下がっている洞窟だった。

「鍾乳洞……?」

「シヨウニユウドウってなに!? 教えて教えて」

そういつて駆け寄ってくる狐筆。宝玉の力を受けて大きくなったけど、持ち前の好奇心と無邪気さは相変わらず。

暗いところは苦手だけれど狐筆となら、怖くなかった。

そう、怖くはないんだけど……

「真っ暗じゃ何も見えないよー!」

「ボクに任せて。」

狐筆は爪で自分の毛を一本ちぎると、ふうっと息を吹きかけた。

そうすると、狐筆の周りに火の玉が複数出現した。

「凄いでしょ! これが『狐火』。ボクの得意技なんだ! 水の中だつて消えないよ。」

「うん! これで先に進めるね。」

先を照らしながら、濡れた足元に注意して進む。道はどんどん狭くなり、ついには人間の私と大きくなった狐筆には窮屈さを感じるほ

どの広さとなった。

「よいしょっと。ねえ狐筆、どんどん狭くなってるけどたどり着けそう?」

「もうそろそろのはずなんだけど……」

狐火を操作して遠くを照らし出す狐筆。しかし森の聖域のようなそれっぽい場所は見当たらない。

ふいに、唯一の光源である狐火が消える。あまりにも突然のことに心臓が止まりそうになったけど狐筆のふわふわの尻尾を握って何とか持ちこたえる。

「あれ? そんなすぐには消えないはずなんだけどなあ」

と狐筆がもう一度狐火を出そうとした瞬間、急に足元の感覚が無くなった。

驚く暇もなく落ちていく私たち。数秒後、鍾乳洞内に私の絶叫が響き渡った。

「沙織、沙織!」

誰かが私の肩をたたく。目を開けるとそこには心配そうに私を見つめる狐筆の姿があった。

「あれ? 確か私いきなり落っこちて、それで……」

「着地したんだよ、ボクの上に。」

ふてくされる狐筆。なるほど、狐筆のふわふわの体で衝撃が吸収されたからあんまり痛くなかったんだ。まあ気絶はしてただけだ。

「う、ごめん！」

「いいよ。それよりも見て沙織。」

狐筆が向く方向尾を見る。そこにあるのは、淡い水色に光る湖だった。

「宝玉の気配がすごいんだ。きっと宝玉はあの中だよ！」

「げ、宝玉ってことは……！」

《へい呼んだかい彼女？》

湖の水が浮かび上がる。その正面にはきちんと仮面が付けられている。た。

「「やっぱり！」」

「でもなんか性格が森の仮面とは全然違うね。」

《へっ、森の仮面はカタブツすぎるんだよ。もっと明るくいこうぜっフウー！》

うわあ、これ私が苦手なタイプだ……。

《てなわけでそのキツネボーイ、この水の仮面サマと戦うんだろ？》

「うん。二つ目の宝玉ももらっていくよ！」

初めに仕掛けたのは、狐筆。しなやかな動きで水の仮面へととびか

かる。

水の仮面はそれをあざ笑うかのように水の球体を発射して狐筆を突き落した。

やっぱり成長したとはいえ、一筋縄ではいかないみたい。さてどうしたものか。

「まだまだー！」

今度は背後に回り込んで水の仮面めがけてジャンプ。

しかし仮面には激突せず、水の体を突き抜けていった。

「なんで当たらないんだよ！」

「多分、あの水の体の中なら、自由に水の仮面は移動できるんだと思う。」

「もう少し小さかったら当てられるんだけどな！」

何度とびかかっても、ふらふらと水の体を移動したり、水の球で攻撃する水の仮面に攻撃を当てられない。水の球は体の水を使うから、だんだん体は小さくなると思いきや湖から断続的に取り出しているから全くサイズは変わらない。

どうしよう、早く何か考えないと狐筆が危ない。

焦る私に、「ごうっと風が吹いてきた。その突風の発生源は狐筆だった。」

「沙織、焦らないで。ボクなら大丈夫だから！」

「——ありがとう。にしても、そんな技使えたっけ？」

「これも翠の宝玉の力で、風の力をもらったんだ！」

「すごいんだね宝玉って。ねえ狐筆、それで狐火を灯すことって出来る？」

「うん。多分できるけど……。」

(ようは水の体を真つ二つにすればいいんだよね。)

私は狐筆の耳元で作戦を囁く。それを聞いた狐筆は自信満々に頷いた。

《へいへい、もうバトルは終了かい？》

「まだ終わってないよ！ね、沙織。」

「うん。まだ終わってない。」

狐筆が元気に水の仮面に飛びかかる。と同時に私は狐筆の毛を数本、湖に流した。

水の仮面が水の球体を発射するにつれ、湖の水、そして流した狐筆の毛が水の体に取り込まれていった。

狐筆の毛はどんどん仮面本体へと近づいていく。

「狐筆、今よ！」

「コオオオオオン！」

狐筆の口から突風が吹き荒れる。突風は水の体を大きくのけ反らせ、

水の体の中の狐筆の毛に狐火を灯した。

《なにっ……》

突風と狐火で、水の仮面の頭が落ちていく。その一瞬を狐筆は見逃さなかった。

何度目か分からない飛びかかりは見事、水の仮面を捉えたのだった。

《う、ぐっ……やるじゃん、人間ガールにキツネボーイ。蒼の宝玉、

持っていきなよ。》

水面にふかふかと浮かんだ水の仮面は、湖の底から青い輝きを放つ宝玉を浮かび上がらせた。

海のように透き通った蒼の宝玉。翠の宝玉がエメラルドならこっちはサファイアだ。

蒼の宝玉は森の宝玉と同じように光線を出して狐筆を大きくしていき。

成長した狐筆はなんと、四つん這いで顔の高さが私と同じくらい。もう人間界の狐の域を超えている。

さあ次はどうとう最後の宝玉。この冒険の終わりももうすぐと考えると、ちよっぴり寂しい気もする。

その時の私は気づかなかった。私たちを陰から見下ろす不穏な影があった事を……。

あか 紅の宝玉と炎の仮面

「あ——っ——い——」
二人（一人と一匹？）でうなだれる。さっきまで涼しい鍾乳洞にいたから、なおさら暑い。

ここは大昔の人が石炭を掘っていた場所で、明治時代に火事が起きたから封鎖されていて、今もなお燃え続けているらしい。

「でもどうやって進むの？ 中にはガスが充満してるだろうし、火だつてまだ完全に消えていないんだよ」

「大丈夫！ サオリ、離れてて。」

「コオオオオオオン！」

狐筆が勢いよく息を吐き出す。キンキンに冷えたその息は一気に燃え盛る炎を消し去った。

「お、もしかして、蒼の宝玉の力？」

「うん、蒼の宝玉は水や氷の力を操れるみたい！」

「そっか……でもすぐに暑くなっちゃったね。」

宝玉の力をもってしても明治時代から続く火事の熱気には適わないようだ。

それでも私達は道を冷やししながら、奥へ奥へと進んでいった。

しばらくするとまるで崖のような、大きく崩れた場所に出た。下にはまるで地獄のような溶岩の海が広がっていた。

「どうしょ……これじゃ渡れないよ。」

困っていると、狐筆がわたしの前でしゃがみこんだ。

「沙織、ボクの背中に乗って！」

確かに、今の狐筆の大きさなら私を軽々乗せていけるだろう。私は額の汗を拭って、狐筆の背中に跨った。

狐筆は走り出すとどしんどしんと、出会った頃からは想像がつかない足音を数回響かせた後、大きく向こう岸までジャンプした。

「……ほんと、大きくなったね狐筆。」

「へへっ、最後の宝玉も手に入れて、もっともっと大きくなるよ！」

そして、

「妖狐の里を復活させる、でしょ？」

「さすが沙織。よしこのまま行くよ！」

私を乗せたまま走り出す狐筆。暑い坑内も、スピードに乗った風で多少涼しく感じた。

流石に三回目ともなると、開けた場所に出たら少し緊張感を持つようになった。

「狐筆、このあたり……？」

「うん、心配が近い。」

とりあえず、と狐筆が氷の息で地面を冷やす。冷気に涼んでいると、地響きが起こった。天井から落ちてくる砂や小石を腕で庇いながら地響きが収まるのを待つ。

予想通り、しばらくすると地響きは収まったが代わりにドン、ドンと大きな足音が地面を揺らし始めた。

そしてその足音は私たちの背後から聞こえている。

《こんにちは、他の仮面から話は聞いてますよ。私は炎の仮面、以後お見知りおきを。》

炎という名にふさわしくないクールさを見せる炎の仮面は、重厚な岩石の鎧を身に纏っていた。

「あ、ご丁寧にどうも。私、美翔沙織と申します。」

「ボクは狐筆！」

《沙織さん狐筆さん、早速ですがどちらが私と戦うのですか？》

「ボクだよ。」

威勢よく前に進む狐筆。ついに、最後の仮面との戦いが始まった。

猛攻に出る狐筆。しかし炎の仮面を覆う岩石は非常に硬く、狐筆の爪も牙も、傷を付けるのが精一杯だった。

体を覆う岩石と岩石の間を狙ってみても、岩石を外すことは出来た

がすぐに近くの石で修復される。

炎の仮面の攻撃はというと、名前の通り烈火のごとく燃え盛る剣での攻撃が主だった。狐筆はその攻撃を躲したり、水の力で止めたりしながら、戦いをこう着状態へと陥らせていた。

(狐筆……)

その中でどうしたら倒せるかを探るのが私の仕事だ。思考をフル回転させて解決策を探る。

(狐火、風の力、水と氷の力。ここにあるのは……溶岩！)

一つ糸口が見つかればあとはそこに向かう道筋を考えるだけ。

作戦を立てた私は例のごとくこそこそと狐筆に伝える。

私の考えた作戦は至極単純。炎の仮面をさっき通った溶岩の海に突き落とすだけ。溶岩というのは『岩』が『溶』けると書くから硬い装甲もきつと溶けるはず。

単純な力押しなら狐筆だってもう引けを取らない。

《こんな強さとは、聞いていませんっ……！》

炎の仮面を坑道に押し出し、幾度かの攻防の後に溶岩へと突き出した。

やはり溶岩を嫌った炎の仮面は岩石の装甲を捨て、宙に飛び出した。新たな体を得ようと岩石を動かす炎の仮面。その岩石はあっけなく

狐筆の水の力で砕かれた。

《ふう。私の負けです。大人しく宝玉を差し出しましょう。》

私たちが突き落とそうとした溶岩の海が噴出したかと思うと、そこから紅の輝きを放つ宝玉が現れた。その輝きは、まるでルビー。

《紅の宝玉は炎の力。どうかこの力が正しきことに使われんことを。》

そういつて炎の仮面は坑道の奥へと去って行った。

「なんかいい人だったね。」

「人、なのかな？まあこれで、三つの宝玉がそろったね。」

紅い光線は、狐筆をさらに家にあるドアの高さくらいまで成長させた。ここまで来ると下手したら馬よりも大きいかもしれない。

そして光線が照らしたのは狐筆だけではなかった。私……の持っている万年筆に光線が当たり、魔法使用のような杖に変化したのだ。

「これ、なに？」

「ボクが封印されていた万年筆が長老の杖になっちゃった！沙織、この杖を使って願いを叶えるんだよ！」

よく見ると杖には丸いポケットが三つ付いている。きっとこの中に宝玉を三つ入れるんだろう。

「さあ、沙織！」

体から翠、蒼の宝玉を取り出す狐筆。

「私に任せてくれるの？」

「沙織は大事な友達だからね！」

友達、という言葉に目頭が熱くなる。

「……ねえ狐筆、もし狐筆が妖狐の里を復活させたら、私たちもう会えなくなるのかな……」

「誰かが、妖狐の里があると信じていれば人間と妖狐の里は繋がっていられるよ。ただ妖狐の里からその門を開けるには結構時間が掛かりそう。」

「つまり、狐筆が妖狐の里に帰ったら、しばらくはお別れなんだね……」

「だから沙織、この事を記しておいて欲しいんだ。妖狐の里があるってことを。」

「その必要はないぜ、ニンゲン。」

どこかから、そんな声が私の耳に届いた。前方には、真っ黒な狐が佇んでいた。

狐筆と射干玉

ついに三つの宝玉を集めた私たちの前に立ちはだかったのは、真っ黒な狐だった。

「ニンゲンと一緒にいたなんてな、狐筆。」

黒い狐はぬうつと音を立てずに狐筆に近寄る。

「射干玉ぬばたまっ……！」

「え？なに？狐筆の知り合い？」

「射干玉。ボクと同じ、妖狐だよ。」

今までにない険しい表情で、私をかばうように立つ狐筆。

「ボクとヌバタマは、幼なじみなんだ。」

「妖狐の里がニンゲンに滅ぼされた、その時までではな……！」

妖狐の里は人間によって滅ぼされた。

その事実には私は鈍器で頭を殴られたようなショックを受けた。

「さあ、こちらに宝玉を渡してもらおうか。ニンゲン。」

射干玉は三つの宝玉を持つ私に近づくと宝玉に手を伸ばした。

「やめろ！何をするつもりだ！」

「決まってるんだろ？宝玉に願いを叶えてもらうんだよ。『人間を滅

ぼしてください』ってなあー！」

「なんでそんなこと……！」

思わず射干玉から距離をとる。

「仕返しだよ仕返し。やられたからやり返す、それだけさ。」

「でも沙織はっ……！」

「いい人間だから手を出すな、か？関係ないな。いい人間も悪い人間も同じように滅ぼす。俺たちがされたように。そのために俺は今まで鍛えてきたんだ。」

何も言い返せなかった。射干玉は受けた理不尽をそのまま返しているだけなのだ。まさに因果応報、滅ぼした側の私には言い返す術を持たなかった。

「俺が間違っているか？間違っていないよなあ。ほら早く宝玉を渡せ。」

「このっ……！！！」

再度宝玉に手を伸ばした射干玉を狐筆は体当たりで突き飛ばした。

「邪魔をするならまずは狐筆、お前から滅ぼしてやる。」

「こい！絶対に沙織には手を出させないからな！」

射干玉が爪を振るう。狐筆はその攻撃を避けようとしたが微かに耳元に当たり、赤い染みを作った。

しばらく攻防が続く、押されているのは狐筆のほうで、その状況を私はただただ茫然とながめていた。

「お前は人間が恨めしくないのか、狐筆！」

「里を襲った人間は恨めしいよ。でも、襲ったのは沙織じゃない！」

「わがままだな。人間には変わりないのに。」

とうとう膝をつく狐筆。

「わがままだよ。妖狐の里を復活させようとするのもボクのがまままだ。でもそれが、ボクの叶えたい夢なんだ！」

わがまま。

一陣の風が私の胸の中を吹き抜けた。

「だったら、人間を滅ぼすことが俺の夢だ。邪魔はさせねえ。」

射干玉の爪が狐筆に向かって振り下ろされる。

私はその間に入って両手を広げた。

眼前で止まった鋭い爪。その威圧感に胸が締め付けられるような感じがした。

「狐筆、私も戦う。」

「沙織！？ 無茶だよ！」

私は杖をぎゅっと握りしめ、大きく息を吸って、吐いた。

「無茶だって分かっている。だってすごく怖いもん。足も震えてる。でも、もう狐筆にだけ痛い思いはしてほしくない！」

「沙織……」

私はあえて、狐筆を見ずにまっすぐ前を向いて狐筆に話しかける。

「助けてもらってばっかりの弱い私は、もういやなの！」

私は杖を構えると翠の宝玉をはめた。竜巻が生まれ、射干玉を吹き飛ばす。

「一人ぼっちの私を、狐筆は友達だって言ってくれた。初めてできた友達の夢を私は叶えたい。それが私のわがまま！」

続けて蒼の宝玉をはめる。清き水が射干玉の黒い息を消していく。

「妖狐の里については、今は謝ることしかできない。でも里が復活したら、できる限りのことはしようと思ってる。だからお願い、過去に囚われないで！」

「俺が、過去に囚われてるだど？」

飛びかかってきた射干玉を狐筆が払いのける。

「そうだよ射干玉。現代の何の罪もない人間を滅ぼして、その先に何があるのさ。ねえ射干玉、ボクだけじゃ里の復興は大変なんだ。力を貸して！」

「俺は、俺はもう後戻りできないんだ！うああああああああ！」

射干玉の闇が、坑道が崩れんばかりの勢いで一気に放出される。

私は最後の、紅の宝玉を杖にはめる。暖かな炎が闇を照らそうとするが、無尽蔵の闇はそう簡単に消えなかった。

しかし、三つの宝玉を杖にセットしたことで杖自体も光を放ち始めた。

万年紡ぐ絆とともに

足元の悪い山道を駆け上がっていく。荒い息を吐きながら、時々木の根っこに躓きながらも私は夢中で走った。

朝起きると、拙い文字で手紙が置かれていた。

『沙織へ』

突然だけど、明日妖狐の里へ帰ることにしました。ゆっくりしていきなよって言ってくれたのにごめんね。沙織の悲しむ顔が見たくなかったから。ボクが帰ってしまっても元気でね。沙織は強いから、友達もたくさんできるはずだよ！

狐筆』

私はすぐさまリビングに降りるとゆっくりしているおばあちゃんに声をかけた。

「おばあちゃん！ 妖狐の里の入り口ってどこ…?」

おばあちゃんは妖狐のことを知っている。昨日の夜狐筆とおばあちゃんが会話してるのをコッソリ聞いたからね。

「山の神社の鳥居ですよ。狐筆はもう着いた頃じゃないかしら。」

「ありがとうございます！」

「やっぱり、沙織は強い子です。ね、狐筆。」

おばあちゃんがそんなことを言ってた気がするけど、急いでた私の耳には届かなかった。

視界の先に、妖狐の里への門である真っ赤な鳥居が見えてきた。その根元に、見慣れた狐の姿も。

「狐筆—！」

今まさに、門をくぐろうとしている狐筆。狐筆は私を視界にとらえると瞳を潤ませた。

「沙織……」

今まで必死に堪えていた涙が堰を切ったように溢れ出す。私はそれでも無理やり笑顔を作って言葉を紡いだ。

「こひ、つ、私……小説家になる！ 今まで狐筆と冒険したこと、楽しかったことも辛かったことも全部！ この万年筆で残していくから！ だから……向こうでも元気にね。」

座り込む私。

狐筆が近づいて私の頬をペロツと舐めた。

「沙織、ありがとう。」

最後にそう言って、狐筆は妖狐の里へと旅立っていった。

くあとがきく

まずは、「万年紡ぐ絆とともに」を最後まで読んでいただきありがとうございます。総合文化部副部長の川野です。

この物語は、小学校高学年から幅広い年代にまで楽しんでいただけたよう制作しました。さて、沙織と狐筆の物語いかがだったでしょうか。私が小説を書き始めてから二年半、できる力の全てをつぎ込んだつもりです。

なんせ初めての一万字越え、必切に追われこのあとがきもなんと公開日の二日前に書いてます。さあ今から製本作業だ！

……さて、書くことが無くなったのでこのあたりで失礼します。これからも、八女工業高等学校総合文化部をよろしく願います！

万年紡ぐ絆とともに

著：川野和哉

表紙：古賀麗賀

発行日：2017/12/23